



Title	中国新出土文献の思想史的研究
Author(s)	草野, 友子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49379
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	くさ の とも こ 草 野 友 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 2 6 0 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	中国新出土文献の思想史的研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 湯 浅 邦 弘 (副査) 教 授 高 橋 文 治 教 授 荒 川 正 晴

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年中国で次々と発見されている戦国時代の新出土文献（竹簡資料）を、思想史研究の立場から取り上げるものである。全体は、第一部「新出土文献研究概述」、第二部「上博楚簡『魯邦大旱』『東大王泊旱』の研究」、第三部「上博楚簡『競建内之』『鮑叔牙與隰朋之諫』の研究」、第四部「上博楚簡『姑成家父』の研究」、の全四部十章から成り、冒頭に、序文と付表三点、巻末に、竹簡の形制一覧や文献提要を三つの附録として加える。分量は、400字詰め原稿用紙換算で約 900 枚である。

中国思想史の研究とはいえ、本論文は、竹簡に記された出土文献を取り扱う。そのため、まず序で、近年発見され、最も注目されている郭店楚簡と上博楚簡について、その全容を整理し、竹簡の形制一覧と竹簡用語の解説を行う。また、第一部では、中国思想史研究の歴史を、古代にさかのぼってまとめた後、郭店楚簡が公開された 1998 年以降現在に至る最新の研究状況を、具体的な論著を紹介しながら総括する。

第二部からは、上博楚簡を取り上げた本論である。まず第二部では、『魯邦大旱』と『東大王泊旱』とを取り上げる。それぞれ、はじめに精密な釈読を示し、次に思想史的特質の検討を行う。この両文献に共通する「干魃」という事件を通して、そこに見える「天」の思想の特徴について論ずる。『魯邦大旱』では、そこに記された子貢の立場が、雨乞いの祭祀を徹底的に否定し、「刑徳」という為政の重要性を主張する特異なものであったことを指摘し、また、『東大王泊旱』も、王の正しい政治が「上帝」に通じ干魃がおさまるとする点において、『魯邦大旱』と共通する思想的特徴を持っていたと指摘する。

第三部では、『競建内之』『鮑叔牙與隰朋之諫』を取り上げる。この両文献は、原釈文の段階では、二つの異なる文献として紹介された。ここでは、釈読については、一

応、その前提に立って進めるものの、両文献の書法や篇題、文脈などの検討から、これらが実は一つの文献であり、篇題としては「鮑叔牙與隰朋之諫」が相応しいと提起する。その上で、この文献に、日食を媒介とする天人相関思想が見えること、鮑叔牙と隰朋を顕彰する執筆意図がうかがえること、などを明らかにする。

第四部では、『姑成家父』を取り上げる。『姑成家父』は、原釈文における竹簡の配列に問題があり、釈読に困難をきたしている文献であるが、ここでは初めてその通読を試みている。特に、読解の際、きわめて重要となってくる「百豫」の意味と、第三簡欠損部分の考証については、新見解を提示する。その上で、類似説話を収録する『国語』『左伝』と『姑成家父』とを比較し、『姑成家父』が、他の伝世文献とは異なり、滅亡した三郤の側に同情的な立場から記述されていることを明らかにする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、申請者の修士論文（平成 17 年度提出）、および『戦国楚簡研究 2006』（『中国研究集刊』第 41 号、2006 年）に掲載された「上博楚簡『競建内之』・『鮑叔牙與隰朋之諫』訳注」、『日本中国学会報』第 59 集（2007 年）に掲載された論文「上博楚簡『競建内之』『鮑叔牙與隰朋之諫』の関係とその思想」、『戦国楚簡研究 2007』（『中国研究集刊』第 45 号、2007 年）に掲載された「上博楚簡『姑成家父』訳注」を基に、さらに、研究史をまとめた第一部、附録などを加え、計四部に再編したものである。

新出土文献の研究、特に上博楚簡の研究は日進月歩の状況にある。新文献が公開されると直ちにインターネット上に数十本の論文が掲載されるという、研究史上劇的な事態を迎えている。こうした中で、本論文は、郭店楚簡・上博楚簡の全容を視野に収めつつ、上博楚簡の四文献について精力的な検討を行っている。

第一部は、研究史の概説であるが、郭店楚簡が公開されてからちょうど十年。こうした総括は初の試みとして評価できる。戦国楚簡の全体像をここまで把握している研究者は世界でも稀であろう。

第二部から第四部の検討は、それぞれ精緻な釈文を作成した上で行われており、特に、第二部・第三部で考察される「天」の思想史における意義については、中国古代思想史研究に新たな材料を提供したものとして評価できよう。第四部の釈読（通釈）も日・中を通じて初の試みであり、申請者の積極的な研究姿勢がうかがわれるに充分である。

ただ、本論文では、既発表の論文を修訂して再編した第三部・第四部と、初めて本論文に収録した第二部との間にやや精度の落差がある。第二部では、特に、『魯邦大旱』の全体的性格とその中に見える子貢の思想との取り扱いについて揺れがある。また、個々の釈読についても、文字学や音韻学の成果を取り込んで再考すべき点があり、さらに、第二部・第三部に共通する思想史的特質である「天人相関」思想については、

章末に総合的な検討がほしいところであった。

とは言え、本論文は、新出土文献を積極的に取り上げ、研究の手法を自ら模索しつつ、各文献を精読した重要な成果である。新出土文献は現在もなお公開途上であり、今後、こうした取り組みを積み重ねることにより、中国古代思想史の書き換えが進むものと期待される。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。